

丹後機業の動き

円安で糸価の高騰 採算割れで進む廃業 急がれる生産基地の再構築

●株価の乱高下など市場の混乱が街角の景況感に影を落としている。内閣府が発表した5月の景気ウォッチャー調査は景気の現状と先行きを判断する指数がともに前月を下回り、株価の変調への不安がにじんだ。株価下落前の5月中旬に調べた消費者心理の指数は4月を上回っており、市場の混乱が早期に収束するかどうかは景気の先行きを左右するとしている。

●円安に伴う急激な変化は、生糸価格の高騰などマイナスの部分が出ている。機業としては資金繰りが課題となり、採算面が悪化している。資金力のあるところは先物で凌いでいるが、今日の糸価で今日の売値では採算は合わない。川上から川下まで資金力のあるところしか生き残れない。

●安倍政権前の円高対策から、急きょ生糸価格の高騰や電力料金の値上げなどから円安対策を望む声が広がっている。しかし、機屋が金融機関に融資を申し込んでも貸してくれないであろう。丹後の織物産地の再構築には、土地、建物の価値の見直しと、個人の信用を保証するためファンドを積み立て貸し出しを求めている。

また、産地として目先のことでなく、後継者・商い・原料確保など目標を持つことが必要である。アクションを起こして長期的なビジョンが必要であるとの声が聞かれた。

(調査時期：平成25年6月上旬～6月中旬)

(調査機関：(財)京都産業21北部支援センター)

【ちりめん(白生地)】

●平成25年1月～6月の生産量は、21.9万反で前年比97.3%（無地4.2万反・同103.1%、紋17.6万反・同96.1%）となった。無地は昨年の減少が大きかったため、ここにきて横並びとなり、紋は昨年をやや減少している。

●財務省の貿易統計によると、平成25年5月現在の小幅白生地輸入量（無地及び紋）は、15.3万反で前年比105.7%と増加している。この内主たる輸入先である中国からは、1万反で前年比78.0%と減少している。

この状況は、中国のコスト高と円安の関係で中国物が丹後物より高くなってきている。これに対してベトナムからは特に無地が増加している。関税面でも中国の10%に対してベトナムは0%であることから生産拠点がベトナムへと移行している。

●中国の生糸価格は、昨年秋以降高止まりの状態が続いている。この状況は、中国経済の成長に伴う人件費等の上昇によるものであり、順当な範囲とし、糸価は今後下がる要素はないとしている。こうした中でさらに高品質な製糸工場が減少し、丹後向けの良質の生糸の入手が難しくなっている。

●中国の糸価にもまして、影響が大きいのが為替の変動である。78円が104円まで下がった。30円近い円安は、糸価にして25～30%近く高騰したことになる。このような急激な変動は、機業としては資金繰りが難しくなり、デフレでは着物が売れない状況の中で商談が進まなくなっている。

●生産の環境が激減している。丹後の無地ちりめんはフル稼働しているが生産量は限界に近い。白生地が売れても生産ができない中で、出機の奪い合いや従業員を募集しても集まらない状況が起きている。機業を確保するためには収入増と待遇改善、さらに難引きのきつさが織手さんの負担を大きくすることから、欠点の発生を軽減する製織方法の工夫が必要としている。

【帯地】

●平成25年度（1～4月）の西陣帯地推定出荷量は、22.4万本で前年比94.8%と減少している。主力の袋帯は89.9%で、洒落物のなごや帯も87.7%と減少している。

●依然として物が売れない動かない状況の中で、越単価が5銭から6銭の価格の安い帯地の生産が続いている。企画的には軽くて色柄をシンプルにした提案としているが、緯糸の色数を少なくすることで胴を軽くして生産コストを下げている。

また、使用する金糸糸に対応した品質表示や証紙の使用など製造者責任の取組は行われている。

機場の減少の中で経待ちや緯待ちは少なく、止まっている機は少ないと見ている。しかし、糸価の高騰から送られてくる糸量が2括を1括にするなど、敷糸を少なくすることで資金繰りに努めている。

●賃機屋では、より多くの賃金を求めるため新しい代行店や京都との直接取引の動きが見られる。京都の親機や代行店でも新しい機場を確保したいとの思いと一致したようだ。体機補償や製織制限より仕事を十分にしたいと飯を食いたいとの思いで、60歳を大分過ぎ、躊躇もしたが決断した。1ヶ月が経過して替わって良かったと思っている。若い人たちは賃金を上げないと生活できない。責任は重くなるが賃金交渉など京都と話し合うことで、機屋として生き残りたいとの思いが聞かれた。

●コンピュータージャカードのコントローラ更新時の支援は大変ありがたい。さらに京都、代行店、機業で分担する支援をお願いしている。

【広幅織物】

●ジョーゼットクレープやサテンクレープなど、各産地の正絹服地の生産現場が縮小している。今日まで正絹との交織をベースにブラックフォーマルを取り組んでいたが、正絹服地の発注がある。他産地の縮小の中で生産体制の見直しが検討されている。

ポリちり関係は最盛期の10分の1まで減少している。需要層の高齢化の中で、残された消費スペースと思われる。

若い消費者は、多くのメニューの中から自分の最も気に入った物を求めるなど、素材の作り出す表情や新しい風合いを求めているようだ。

また、円安の中で海外展開は日本のすぐれた素材を提案できるチャンスであるとしている。

●ネクタイは予定どおりの注文が入り5月連休明けから秋物がフル生産の状況であるが、クールビズに加えスーパークールビズの取組により見通しは悪い。加えて円安の進行は生糸価格を高騰させているが、幸いに約定があり、現状では比較的安い生糸の使用で秋物は乗り切れるとしている。

しかし、8月から始まる春物のサンプル取りには値上げをお願いして10月頃から本生産に入る予定だ。

また、糸の手配は糸商と機屋の力関係もあるが、お互いの信頼関係の中で先物を求める。為替の安定が必要としている。

●カーシートは、円安で自動車の生産が回復し、カーシート地の稼働率がよくなってきている。しかし、国内競争は激しく、高速織機（500rpm以上）を基準とした単価の算出であり、丹後の生産能力では状況は厳しい。

また、織機の箴室は200cm以上の広幅の仕様でジャカード機の搭載が求められ、機拵も機業負担で200万円程必要となる。こうした中で、比較的生産が安定しているお守り地の製織に移る機業もある。

【小物】

●正絹のフォーマル用の風呂敷が売れない。これは、人生の節目等の行事の減少により、使用が少なくなっているためと思われる。

これに対してポリエステル製の風呂敷は、寸法安定性や耐光堅牢度が優れていることから、クッションカバーやテーブルセンターなどいろいろな用途に使われ広がりを見せている。

●半襟は、生産機業が減少する中で比較的コンスタントに流れている。糸価の高騰分を転嫁することが出来つつあるとしている。

●帯揚げは、中国からの輸入品が減少して丹後全体で見ても生産が不足している。振り袖用の総絞りは全て中国製であるが、中国でも職人が減少し生産が出来なくなっている。また、輸入品は円安で価格差がなくなっている。しかし、糸価の高騰分を先に転嫁できず、利益率の低い商いとなっている。

●レーヨンちりめんの資材関係は比較的コンスタントに需要がある。しかし、巾着、ポーチ、財布等の和装小物の売上は伸び悩んでいる。